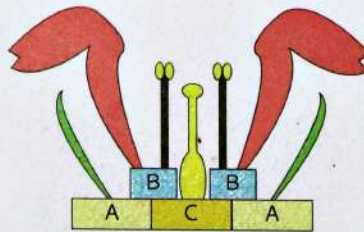


八重咲きになるしくみ

花の構造

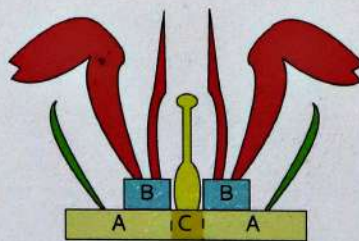
現在では、花の器官はA B Cで表される3つの遺伝子の働く位置の組み合わせにより、がく・花弁・雄しべ・雌しべになると考えられています。A遺伝子だけが働く部分ではがくになり、AとB遺伝子だと花弁になります。BとC遺伝子だと雄しべ、C遺伝子だけでは雌しべになります。



桜草の断面

八重咲き

加茂花菖蒲園の一江氏が八重咲きの程度の強いサクラソウを見つけ出し、これを元にたくさんの八重咲きの系統を育成しました。これらは雄しべが花弁化したもので、C遺伝子の機能が弱くなり雄しべが花弁化しており、アサガオでいう八重咲きと同じ変異だと考えられます。



八重咲きの断面

無弁花

B遺伝子の機能がそこなわれ、A遺伝子とC遺伝子しか働かないと花の器官ががくと雌しべだけになり、そのようなものを無弁花といいます。同じような変異はアサガオにも存在しています。

